令和３年７月１日発行（毎月１日発行）

2021.7
（公社）富山県薬剤師会
広報誌

とみやく 富薬

7号
第43巻
No.384

ムクゲ *Hibiscus syriacus* L.　（アオイ科 *Malvaceae*）

生薬　モクキンカ（木槿花）

生　薬　モクキンカ（木槿花）　夏の開花期、花が開き始める早朝に蕾を採取し、陽乾する。

成　分　フラボノイド：saponarin、根皮には tannin、粘液質等。

効　能　粘滑、清熱、利湿、解毒、止痒、止瀉薬として細菌性胃腸炎、出血性の下痢、腸出血、膀胱炎に用いる。

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター
村上守一氏　写真撮影

○○表紙について○○

耐寒性に加え耐暑性もあり挿し木などで容易に繁殖できることから各地で庭や垣根に植栽されています。高さ３－４ｍほどになる落葉性の低木で、葉は互生、卵形から卵状菱形で３浅裂します。夏から秋にかけて咲く花は朝早く開き、同属のフヨウ（*H. mutabilis*）に似ていますが花径は５－７cmほどと小さく、花色も紅、紫、白色と多彩で、八重咲など多くの園芸品種があります。果実は卵円形で、種子は腎形、背に褐色の長毛が密に並びます。

世界各地で植栽されていますが原産地ははっきりしません。種小名の*syriacus*は「シリア原産の」を意味し、ヨーロッパより東方の小アジア、インド、中国が原産ではないかと推測されています。日本には中国から朝鮮半島を通じて入ったようです。中国の最も古い辞書『爾雅』（BC200頃）に「椵は木槿。槶は木槿。別の二名なり。李樹に似て花は朝生じて夕に落つ。食うべきなり」とあり、また『説分解字』（100）に「蕣は木堇、朝に華咲き暮れに落つる者なり」とあるところから中国ではかなり古い時代から植えられた花木と考えられます。

本草書に現れるのは『本草拾遺』（739）からで「木槿、平、無毒、腸風瀉血を止める。痢後の熱渇には、飲料としてこれを服用すれば、睡らしめる、さらに炒ったものを服用する」と薬効について記され、植物としての説明は『本草行儀』（1119）に「木槿は小葵の如くで、淡紅色である。五葉にして一花をなす。朝開いて暮に斂まる。湖の南、北では、人家で多く種植して籬障と為す」とあり、また明代の本草書『救荒本草』（1406）には「木槿樹　本草に云う。木槿小葵の如く、花は淡紅色、五葉、一花を成す。朝開き暮れに斂まる。花枝を與兩用する。湖南北の人家に多く、種植して籬障とし、亦、千葉の者あり。人家、園圃に多く栽種す。性平、毒無し。葉味甜。救飢　嫩葉を採り、煠き熟し、冷水に淘浄し、油塩に調え食う」と、栽培や食用にすることなどをより詳しく説明し、付図もムクゲそのものです。

日本に渡来した時期ははっきりしません。『倭名類聚抄』（931－937）には『説分解字』の「蕣」に「和名木波知春」と和名を与えていることからこの頃には渡来していたのではとも考えられています。「むくげ」の名は『撰集抄』（13Ｃ）に「頭とて髪の生ゆべき所にはさいかいの葉とむくげの葉を灰に焼きてつけ侍り」とあるのが初出で、この頃には渡来していたことがはっきり分っています。また室町時代の辞典『下額集』（1444）では漢名「槿花」に「むくげ」のルビをふり、読ませています。江戸初期の『多識編』（1612）も「木槿、今案るに牟久計」とし、「むくげ」の名が定着していたようです。「槿花」、「むくげ」の名は「木槿花」の呉音「もくこんげ」が転訛したという説や、朝鮮名の「無窮花」の日本語読み「むきゅうげ」が訛って「むくげ」になったと言われています。

『大和本草』（1709）には「木槿　むくげはモクキンの轉語なり。木花の下品也といえども好花も亦あり。今世、紅白、単葉、千葉、重葉その種類多し。大紅千葉の者、白千葉の者有り。この二種よし。万葉の歌に[朝顔の朝露負いて咲くと雖云ど暮陰に社咲き益り家禮]、此の歌を以て見れば朝貌即ち槿花なり。牽牛子に非ずは明らかなり。牽牛子は古今集にケニゴシとよめり。又、和名抄には牽牛をアサガホと訓せり。然れば木槿花をも、牽牛花をもアサガホといえるなるべし。一名二物なり。凡和漢ともに一名二物多し。花も実も木芙蓉に似たり。正月に挿し挾し、屢水をそそげば能く活く」と種々の品種があること、挿し木で繁殖することなどが記されるとともに、万葉集（７Ｃ－８Ｃ）のアサガオはムクゲであると断定しています。この説に従うならば奈良時代には日本に渡来していたことになります。　（村上守一　記）